

映画製作専門家養成講座(第4回)

— 高村倉太郎とその仲間たち —

応募要項



主催
東京国立近代美術館フィルムセンター

企画・助言
平成12年度映画製作専門家養成講座実行委員会
(品田雄吉、高村倉太郎、野上照代、堀越謙三、松本正道、宮澤誠一)

会場
東京都中央区京橋3-7-6
東京国立近代美術館フィルムセンター 小ホール(地下1階)

受講料
無料。ただし、受講料金以外の交通費や食費、宿泊費等は受講者の負担となります。

修了証
受講修了者には全講座(4日間)出席をもって、修了証を発行します。

応募資格
映画(自主製作を含む)をはじめ、TVやビデオ製作など、映像製作の諸分野で助手等の現場経験を有する方、映画・映像に関する専門学校などで実習経験を有する方ならどなたでも応募できます。
ただし、応募多数の場合には募集定員の範囲内で審査を行います。

募集定員
100名程度

応募方法
応募用紙に氏名等必要な事項を記入の上、切り離して封筒を作成し郵送して下さい。

募集期限
平成12年12月12日(火)必着
なお、書類選考の上、応募用紙に添付された所定のはがきにて合否の通知を行います。

*上記内容については一部変更になることがあります。あらかじめ御了承下さい。

応募用紙送付先／問い合わせ先
〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6
東京国立近代美術館フィルムセンター
映画製作専門家養成講座事務局
電話 03-3561-0823 (代表)



當団地下鉄銀座線京橋駅下車、出口1から昭和通り方向へ徒歩1分
都営地下鉄浅草線宝町駅下車、出口A4から中央通り方向へ徒歩1分
當団地下鉄有楽町線銀座一丁目駅下車、出口9から徒歩5分
JR東京駅下車、八重洲南口から徒歩10分

平成12年度／第4回

映画製作専門家養成講座

— 高村倉太郎とその仲間たち —

応募要項



主催 東京国立近代美術館フィルムセンター

平成12年度映画製作専門家養成講座(第4回)

—高村倉太郎とその仲間たち—

はじめに

映画産業の縮小や非フィルム映像産業の拡大につれて、日本映画の豊かな歴史を支えてきた優れた技芸の一部は過去のものとなる傾向にあり、近年、これを憂慮する声が次第に大きくなっています。わが国唯一の国立映画研究機関である東京国立近代美術館フィルムセンターは、映画(フィルム)を取り巻くこうした技と匠が世界に誇り得る技術的文化遺産であるとの認識から、それらを次世代に正しく伝え、将来の映画人を育成すること、ならびに映画芸術の発展に資することを目的として、平成9年度より「映画製作専門家養成講座」という事業を実施してきました。

これまで、監督、撮影、照明等、部門別に講座を開催してきましたが、映画製作に関わる主要な部門は前3回の実施でほぼ網羅したと言えます。これに伴い、4回目を迎えた今回は、従来の部門別の形式をとらず、より広く映画製作を学ぶことのできる場を提供することといたしました。今回は、総合プロデューサーの高村倉太郎先生が実際に撮影を担当された作品を通じて、生きた映画の技術を具体的に学んでいただきます。

日本映画の技と匠を、師匠から弟子へ、先輩から後輩へ、ベテランから新人へ伝えようとするこの講座が、日本映画の良き伝統を守る一助となり、また、映画映像製作に携わる方々の交流の場となることを願っております。

東京国立近代美術館フィルムセンター

講師紹介

各講座の内容は、映画の現場におけるように本講座の総合プロデューサーによってアレンジされたものです。

受講者は、総合プロデューサー、各講座の講師とともに映画を鑑賞し、質疑応答をまじえながら映画製作の技術等について講義を受けます。



総合プロデューサー

高村倉太郎 (たかむら・くらたろう)

撮影

1921年生まれ。'39年、松竹大船撮影所撮影部入社。武富善男、猪飼助太郎らに師事し、木下恵介監督作品のB班撮影などを務めたのち、'49年、「恋愛三羽鳥」(中村登監督)で撮影監督として一本立ちする。「東京マダムと大阪夫人」('53)に始まる川島雄三監督とのコンビは、'54年に製作を再開した日活への移籍後も続き、「洲崎パラダイス 赤信号」('56)、「幕末太陽傳」('57)など9本に及ぶ傑作群を生んだ。以後、「俺は待ってるぜ」('57)、「錆びたナイフ」('58)、「夜霧のブルース」('63)といった石原裕次郎主演作のほか、小林旭の「渡り鳥」('59-62)、宍戸錠の「稼業」('61)、高橋英樹の「男の紋章」('63-66)、渡哲也の「無頼」('68-69)など、その時々の看板シリーズを背負って立ち、日活を代表する撮影監督となる。西河克己をはじめ、9監督の昇進第1回作品を手がけるなど、常に若い人材の育成に努め、ロマンポルノへの移行後も、田中登、曾根中生、藤井克彦など、ポルノに活路を見い出した若手監督の意欲作を積極的にサポートした。最近作「一杯のかけそば」('92)まで、139本の劇場用映画のほか、テレビ映画およそ200本、短篇・CMおよそ45本がある。現在、日本映画撮影監督協会理事長。

参考文献:「撮影監督 高村倉太郎の世界」(J.S.C.撮影新人会、'96)I-754

2/6 (火) 第1講 白黒映画とカラー映画



講師

丸池納 (まるいけ・おさめ)

撮影

2/7 (水) 第2講 新人監督との仕事



講師

西河克己 (にしかわ・かつみ)

監督

2/8 (木) 第3講 日活ロマンポルノへの挑戦



講師

田中登 (たなか・のぼる)

監督



講師

熊谷秀夫 (くまがい・ひでお)

照明

2/9 (金) 第4講 川島雄三の世界



講師

中村公彦 (なかむら・きみひこ)

美術

高村氏は松竹での撮影助手時代、初期カラー映画の開発に携わった経歴を持つ。日本初の長篇カラー劇映画「カルメン故郷に帰る」('51)にカラー技術者として参加したほか、カラーの2巻物やPR映画も早く手がけた。白黒とカラーそれぞれの特質を厳密に追及する技術者の目は、カラーの先駆的な仕事によって培われたとも言える。「俺は待ってるぜ」('57)は、日本映画界全体で白黒からカラーへの移行が始まった時期の

1948年生まれ。'74年、日活撮影部入社。主に姫田真佐久に師事し、高村倉太郎には「アフリカの鳥」('75)ほか数本で付く。'78年、フリーとなり、'86年、第1回担当作品「ウホッホ探検隊」(根岸吉太郎監督)を撮る。以後、根岸監督と「乳房」('93)、「絆」('98)と3度にわたって組むほか、串田和美監督の「上海パンスキング」('87)、和田誠監督の「怪盗ルビイ」('88)、市川準監督の「ノーライフキング」('89)、君塚匠監督の「喪の仕事」('90)、長崎俊一監督の「ナースコール」('93)など、個性的な監督との

白黒作品。高村氏が初めて手がけた長篇カラー劇映画「危険な年齢」('57)の後に位置し、白黒の特質を意識的に活かした画面が堪能できる。細心のライティングやフィルターワークによって生み出される画調の微妙な差異を、スライド等の資料によって実際に体感しつつ、白黒映画の到達点を検証する。

上映作品:「俺は待ってるぜ」('57)、日活、蔵原惟繕監督)

共同作業を重ねる。'96年、小栗康平監督の「眠る男」で一躍注目を浴び、毎日映画コンクール撮影賞、日本映画技術賞、第1回東アジア映画祭最優秀撮影賞を受賞。他にオリジナルビデオ、テレビ作品、CMなど多数。現在、竹下昌男監督の「Y」を準備中。撮影監督協会の若手会員に呼びかけて「名作上映技術研究会」を定期的に開催するなど、先達の技の継承にも力を注いでいる。

組んだ「生きとし生けるもの」('55)には、新たな活動の場を得た若い映画人たちのエネルギーが溢れている。西河監督を皮切りに、以後高村氏は小沢啓一、松尾昭典、蔵原惟繕、藤浦敦、今村昌平、小林正樹、沢田幸弘、飯塚二郎という9監督の第1作を手がけることになった。

上映作品:「伊豆の艶歌師」('52)、松竹、西河克己監督
「生きとし生けるもの」('55)、日活、西河克己監督)

'69年日活を退社、活動の場をテレビに移す。ホリ企画製作の「伊豆の踊子」('74)で映画に復帰、「エデンの海」('76)なども再び取り上げて山口百恵を育てた。「生徒諸君!」('84)、「マイフェニックス」('89)などを経て、'92年には「一杯のかけそば」で14年ぶりに高村氏と組み、健在ぶりを示した。

参考文献:西河克己、権藤晋「西河克己映画修業」(ワイス出版、'93)H-431

西河克己『伊豆の踊子』物語(フィルムアート社、'94)H-749

ラン照明技師は、女性の身体という新たな被写体に向けてどのような光を当てたのだろうか。厳しい製作条件を逆に創造の糧とした先達の体験からは、現在の映画製作が抱える諸問題にも直接有効な視点を汲み取ることができるだろう。

上映作品:「^④女郎責め地獄」('73)、日活、田中登監督)

1971年、日活は一般映画からロマンポルノへの転換を図る。新たに自主企画の道が開け、若い監督が数多くデビューを果たした。20年以上のキャリアをもつベテラン撮影監督と、若く意欲的な新人監督は、性描写を一定程度盛り込み、しかも行き過ぎてはならないという複雑な要請や、低予算の枠といかにして闘い、独自の表現を見出したのだろうか。また、大映時代劇から日活アクションというフィールドを歩んできたベテ

田中登 1937年生まれ。明治大学仏文科在学中から、黒澤明監督「用心棒」ほか映画製作現場のアルバイト、シナリオ研究所での実作などを経験し、「61年、日活に助監督として入社。日活在籍の監督のほとんどに付き、「72年にロマンポルノ「花弁のしづく」で監督デビュー。73年の「^④女郎責め地獄」では日本映画監督協会新人奨励賞を受賞。「色情めす市場」('74)、「実録阿部定」('75)、「江戸川乱歩狩奇館 屋根裏の散歩者」('76)、「女教師」('77)、「人妻集団暴行致死事件」('79)などで、性の深淵に向け自己主張を貫き、「ピンクサロン 好色五人女」('79)では日本アカデミー賞優秀監督賞を受賞。「81年にフリーとなり、「丑三つの村」('83)、「薔の眺め」('86)、「妖女伝説'88」('88)を手がけたほか、テレビ作品を中心に現在も意欲的な活動を続けている。

参考文献:「官能のプログラム・ピクチュア:ロマン・ポルノ 1971-1982全映画」(フィルムアート社、'83)

熊谷秀夫 1928年生まれ。'48年に大映京都照明課入社、岡本健一に師事し、溝口健二監督作品などに付く。'56年、日活に移籍。'58年、「赤いラップの終列車」(小杉勇監督)で一本立ちし、「61年よりフリー。高村倉太郎とは「無頼」シリーズをはじめ、舛田利雄や小沢啓一監督作を中心に多くのコンビを組んだ。鈴木清順監督の「東京流れ者」「けんかえれじい」('66)で見せた大胆な照明は「清順美学」の確立に大いに貢献し、ロマンポルノでは、ポルノ移行第1作「団地妻 昼下りの情事」('71)、西村昭五郎監督)以来、40本以上を確かな技術で支えた。「セーラー服と機関銃」('81)以降の相米慎二監督作品を一貫して手がけるほか、近年は「学校」シリーズをはじめとする山田洋次作品でも安定した実力を発揮している。「おろしや国酔夢譚」('92)、佐藤純彌監督)で日本アカデミー賞最優秀照明賞など賞歴多数。最近作は「釣りバカ日誌イレブン」('00)、木本克英監督)。現在、日本映画照明技術者協会会長。

が確立されたのは、彼ら主要スタッフがこそって移籍した日活でのことである。川島監督の日活最後の作品(この後東京映画に移籍)である「幕末太陽傳」('57)は、ラストシーンの特撮をはじめとして、撮影・美術・照明など川島組のスタッフ・ワークの頂点を画するものであった。

上映作品:「幕末太陽傳」('57)、日活、川島雄三監督)

ダイス 赤信号」「わが町」('56)などの川島監督作品から、「鷺と鷹」「嵐を呼ぶ男」('57)などの裕次郎もの、「日本残侠伝」('69)、「牡丹と竜」('70)などの任侠ものまで幅広く手がける。また、川島の助監督であった今村昌平とは、第1回監督作の「盗まれた欲情」('58)以来7作で組み、「豚と軍艦」('61)では日本映画技術協会美術賞を受賞している。その他の代表作に「青春怪談」('55)、「乳房よ永遠なれ」('55)、「キューポラのある街」('62)などがある。

*上記の参考文献はNFC図書室で閲覧することができます。書名に付された記号は請求番号を示します。